

平成21年(行コ)第261号 公金支出差止等請求控訴住民訴訟事件

控訴人 齋田友雄外17名

被控訴人 群馬県知事外1名

証 拠 説 明 書(甲B第132～138)

平成23年11月15日

東京高等裁判所 第11民事部 御中

控訴人訴訟代理人弁護士 福 田 寿 男

号 証	標 目	(原本・写 しの別)	作 成 年 月 日	作 成 者
甲B第132 号証	第176国会 予算委員会 平成22年10月12日 議事 録抜粋	写	H22.10.12	衆議院
	立 証 趣 旨			
	河野太郎衆議院議員の、予算委員会での質問に対して、馬淵国土交通大臣が、利根川における過去の洪水の流出計算において、飽和雨量につき、1958年洪水では31.77mm、1959年洪水では65mm、1982年洪水では115mm、1998年洪水では125mmという値を用いて計算している旨の答弁を行った事実を証する。			
		(原本・写 しの別)	作 成 年 月 日	作 成 者
同第133号 証の1	馬淵大臣会見要旨(平成2 2年10月15日)	写	H22.10.15	国土交通省
	立 証 趣 旨			
	馬淵大臣が、平成22年10月15日の記者会見において、利根川治水計画の計算に使ったデータ等に関しては、徹底的に点検を行う旨述べ、流出計算モデルの妥当性を含めて見直しを行うことを、河川局に指示を出した、などと述べた事実を証する。			
号 証	標 目	(原本・写 しの別)	作 成 年 月 日	作 成 者
同第133号 証の2	馬淵大臣会見要旨(平成2 2年10月22日)	写	H22.10.22	国土交通省
	立 証 趣 旨			
	馬淵大臣が、平成22年10月22日の記者会見において、昭和55年の基本高水のピーク流量の計算について、「具体的にどのようにして流出計算が行われたかという資料が現時点では確認できない」と述べ、徹底的に調べるよう指示した旨述べた事実を証する。			

号証	標目	(原本・写しの別)	作成年月日	作成者
同第133号証の3	馬淵大臣会見要旨(平成22年11月2日)	写	H22.11.2	国土交通省
	立証趣旨			
	馬淵大臣が、平成22年11月2日の記者会見において、利根川治水の「基本となる基本方針で定められた基本高水についてしっかりと平成17年に検証を行っていなかったということ」を認め、そのことについて、「国土交通省として大変問題であると思う」などと述べた事実を証する。			
号証	標目	(原本・写しの別)	作成年月日	作成者
同第133号証の4	馬淵大臣会見要旨(平成22年11月5日)	写	H22.11.5	国土交通省
	立証趣旨			
	馬淵大臣が、平成22年11月5日の記者会見において、同年11月2日の会見内容を引きながら、「昭和55年度に定めた基本高水のピーク流量について、飽和雨量などの定数に関してその時点で適切なものかどうか十分検証が行われなかった」旨を述べ、「結果から見れば「22,000トンありき」の検討を行ったということでもあります。」と述べた事実を証する。そして、こうした事態は、「利根川治水計画の基本である基本高水の信頼性が揺らぎ兼ねない問題である」との認識を示し、この問題の検証を学識経験者に委ねる旨の見解を述べた事実を証する。この大臣発言によっても、平成18年2月の河川整備基本方針の策定手続の瑕疵が認められ、ピーク流量の合理性や相当性には十分な疑問が生じてくる。本書証によって、以上の事実を証する。			
号証	標目	(原本・写しの別)	作成年月日	作成者
同第134号証	欠番			
	立証趣旨			

号証	標目	(原本・写しの別)	作成年月日	作成者
同第135号証の1	第21回 河川整備基本方針検討小委員会議事録(平成17年10月3日)	写	H17.10.3	国土交通省
	立証趣旨			
	第21回河川整備基本方針検討小委員会における国交省の事務方の説明において、「実際のカスリーン台風の洪水は大体、毎秒22000m ³ という洪水が流れてくる」とか、「これは観測史上最大の昭和22年カスリーン台風が大体、毎秒22000m ³ であります」などとの説明が繰り返されている事実を証する(これは虚偽の説明である)。そして、カスリーン台風の降雨で、その規模の洪水がながれるには、上流部での大規模な河道改修が条件とされているが、そうした条件等については、何らの解説も説明もなされていない事実を証する。			
同第135号証の2	欠番			
	立証趣旨			
同第135号証の3	「特徴と課題」抜粋(表紙と3頁まで)	写	H17.10.3	国土交通省
	立証趣旨			
	第21回の検討小委員会で配付された資料であるが、そこには、昭和55年の計画における基本高水の設定理由が、「昭和22年9月カスリーン台風洪水について、八斗島地点上流の河川整備等による氾濫量の減少を考慮し、基本高水のピーク流量を変更」(3頁)とされているが、現在でも、カスリーン台風が再来しても、八斗島地点には毎秒1万6750m ³ の洪水となるとされているのであり(甲B第39号証)、下流部の洪水量が増加するほどの上流域での河道改修は認められない。この「特徴と課題」でも虚偽の情報が流されている。これらの事実を証する。			

号 証		(原本・写 しの別)	作 成 年 月 日	作 成 者
同第136号 証の1	第28回河川整備基本方針 検討小委員会議事録(平 成17年12月6日)	写	H17.12.6	国土交通省
	立 証 趣 旨			
	<p>第28回整備基本方針検討小委員会において、国交省の事務方から森林の状況について説明がなされたが、その説明は、カスリーン台風時と、昭和55年、そして最近まで、「森林の状況そのものはあまり変わっていないのですが、既定計画策定以降も近年の森林の状況のものでも一応流出計算をしてみますと、同じ計算モデルで十分再現性が高いという状況が見て取れます。」と説明している。馬淵大臣によれば、この間、飽和雨量は、30mmから125mmにまで上昇している。こういう状況であっても、事務方は、森林の状況は変わらず、同一モデルで再現計算が十分にできた、と説明をしたのである。</p>			
号 証	標 目	(原本・写 しの別)	作 成 年 月 日	作 成 者
同第136号 証の2	「基本高水等に関する資料 案(平成17年12月6日)」 抜粋	写	H17.12.6	国土交通省河川局
	立 証 趣 旨			
	<p>この「資料」は、第28回の検討小委員会で配布されたものであるが、その14頁には、「基本高水のピーク流量は、各基準点における確率流量と観測史上最大流量のいずれか大きい方を採用し、八斗島地点22,000m³/S……と決定した」と記述されており、その記述の下の「表4-1 基本高水ピーク流量の設定」には、「観測史上最大流量 22,000」とも表記されている事実を証する。同検討小委員会では、こうした虚偽の情報が委員らに提供されていた事実を証する。なお、提出部分は、表紙及び目次、9頁から13頁である。</p>			
号 証	標 目	(原本・写 しの別)	作 成 年 月 日	作 成 者
同第137号 証	第30回河川整備基本方針 検討小委員会議事録(平 成17年12月19日)	写	H17.12.19	国土交通省
	立 証 趣 旨			
	<p>第28回整備基本方針検討小委員会においては、「利根川水系河川整備基本方針」の案文の紹介が主たる議題で、この段階では、基本高水のピーク流量の相当性や妥当性については、審議の対象とされていない事実を証する。</p>			

号 証	標 目	(原本・写 しの別)	作 成 年 月 日	作 成 者
同第138号 証の1	中島隆利衆議院議員の質 問主意書	写	H22.11.2	中島隆利衆議院議員
	立 証 趣 旨			
	<p>中島利隆議員は、上記の質問主意書において、7項目の質問を行っているが、その中に、「基本高水流量を求めたときの、カスリーン台風洪水再来計算」のやり方について質問を行っている。甲B第138号証の2の答弁書は、これについて答弁している。これらの事実を証する。</p>			
号 証	標 目	(原本・写 しの別)	作 成 年 月 日	作 成 者
同第138号 証の2	中島隆利衆議院議員の質 問主意書に対する内閣の 答弁書	写	H22.11.12	内閣総理大臣
	立 証 趣 旨			
	<p>中島議員の質問に対し、内閣は、「八斗島地点毎秒2万2000m³」の算定根拠ないし流出の条件として、「昭和55年に利根川水系工事実施基本計画を変更した際の基本高水のピーク流量の検討の過程において行った流出計算は、将来的に堤防等の整備が進んだ状況を想定した上で、洪水調節施設が存在しないと仮定して計算したものである」(質問4, 5, 及び7に対するもの)と答弁している事実を証する。このことから、平成17年度の検討小委員会での説明が虚偽であったことが明らかとなる。なお、この内閣の答弁の趣旨は、乙第278号証の1の「回答」とほぼ同趣旨である。</p>			